

日本の漫画作品に描かれた考古学者（1）

——1950～70年代——

櫻井 準也

Images of Archaeologist in Japanese Comics (1):

1950s-1970s

SAKURAI, Junya

Abstract

The archaeologist appeared in Japanese comics which are one of the contemporary popular cultures at many comic writer's works including the maestros of Japanese comic community, such as Osamu Tezuka and Shoutarou Ishinomori. Although there were not so many comics in which an archaeologist appeared till the 1960s, when the 1970s came, the number of the comics increased, and reflecting a social trend of those days. For example, some archaeologist characters appeared in the work which was subject to the influence of the occult boom of 1970s. And the archaeologist character of 1950s-1960s was middle-aged man and usually wore the scholar like suit, and wore fatigue uniform or Safari look at excavation and outdoor activity. After 1970s, the new archaeologist character of different image from these characters has appeared. Japanese comic works can be regarded as precious data which can know the image of archaeologist and archaeology in Japanese society of those days.

要 旨

現代のポピュラー・カルチャー（大衆文化）の一つである漫画には、手塚治虫や石ノ森章太郎などの漫画界の巨匠たちをはじめ、多くの漫画家の作品に考古学者が登場してきた。その数は1960年代まではそれほど多くなかったが、1970年代になるとその作品数が増え、当時のオカルトブームの影響を受けた作品に考古学者が登場するなど当時の世相を反映している。また、1950年代から1960年代の考古学者キャラクターは

中年男性で、普段は学者らしいスーツ姿、発掘調査や野外活動においては作業着姿やサファリ・ルックで描かれるが、1970年代になるとこれらとは異なったイメージの新たなキャラクターが出現している。このように、漫画作品は当時の日本社会における考古学者や考古学のイメージを知ることができる貴重な資料として捉えることができる。

キーワード

ポピュラー・カルチャー (Popular Culture)

漫画 (Japanese Comics)

1950年代～70年代 (1950s-1970s)

考古学者イメージ (Image of Archaeologist)

サファリ・ルック (Safari look)

オカルトブーム (Occult boom)

はじめに

漫画は映画やアニメなどとともに現代のわが国のポピュラー・カルチャー（大衆文化）を構成する重要な要素となっている。また、漫画やアニメは実写映画などと比べて表現の自由度が高いため、登場する風景や事物、さらには人物の描かれ方を分析することによって制作者（あるいは作品を鑑賞する人々）がその対象に対して抱いているイメージがどのようなものか知る手がかりとなる。この点については漫画に描かれた遺跡や考古学者についても同様であり、その描かれ方はその当時の遺跡や考古学者に対するイメージを反映するものである（岡田2006）。これに対し、漫画大国であるわが国では多くの考古学者が漫画作品に登場する。なかでも1989（平成元）年に登場し、1998（平成10）年にアニメ化され、現在の40代を中心とする考古学研究者にファンの多い『MASTER キートン』の平賀＝キートン・太一や1997（平成9）年に漫画雑誌に登場し、1999（平成11）年にアニメ化され現在でも高い人気を誇っている『One Piece』のニコ・ロビンなどは特に有名なキ

ャクターである。それ以外にもわが国では様々な漫画作品に考古学者が登場しており、考古学者は実在する様々な分野の学者の中でも漫画作品への登場数では突出した存在である。

さらに海外に目を向けてみると、漫画作品に登場する考古学者の中でも特に古いと思われるのがベルギーの漫画家エルジェ（本名ジョルジュ・プロスペル・レミ）の『タンタンの冒険』シリーズの「ファラオの葉巻」に登場するエジプト考古学者フィレモン・サイクロンである。『タンタンの冒険』は1932年から1934年にかけて『20世紀子ども新聞』にフランス語で掲載されているが、4作目の「ファラオの葉巻」は1934年に出版され、わが国では翻訳版が1987年に出版されている（エルジェ1987）。主人公のタンタンが上海に向かう船上で出会った人物がフィレモン・サイクロンで、彼はエジプトでファラオのケオセフ王の墓の発見を目指すエジプト考古学者である。作品では浮世離れしたサイクロンの性格や細身で禿げ頭、眼鏡をかけ長い髭を生やした中年男という風体や燕尾服に山高帽という服装（ジャングルでは燕尾服に半ズボンである）は、当時の考古学者イメージの一端が反

映されている。燕尾服に山高帽という服装は当時の上流階級に属する学者イメージであるとともに、戦前の考古学者がスーツ姿で発掘調査に立ち会うことが多かったことも関連していると思われる。また、この作品はエジプトが舞台の一つでミイラも登場するが、この背景に1922年のツタンカーメン王墓の発見があることは明らかである⁽¹⁾。同様に1932年に制作されたカール・フロイント監督の映画『ミイラ再生』などにみられるように欧米では1930年代から1970年代にかけてエジプトのミイラを題材とする映画が多く制作されている(櫻井2014)。

このように海外では既に戦前から漫画作品に考古学者が登場しているが、わが国では1950年代以降の漫画作品に考古学者が登場する。そこで本稿では1950年代から1970年代にかけて考古学者が登場する漫画作品を紹介しながら、当時の考古学者イメージやその社会的背景について若干考察を加えてみたい。

1. 漫画作品に描かれた考古学者

1.1. 1950年代

わが国の漫画界の巨匠で現代アニメの生みの親でもある手塚治虫の作品には、既に1950年代の作品に考古学者が登場している⁽²⁾。その中でも作品の中で重要な役割を演じている考古学者キャラクターが登場するのが1955

(昭和30)年に『少年』7月号に掲載されたSF漫画『鉄腕アトム』シリーズの「冷凍人間の巻」⁽³⁾である(手塚2002)。本作品の舞台はマヤのピラミッドであり⁽⁴⁾、アトムが発掘調査の邪魔をする敵と戦うためメキシコへ行くという内容で、ピラミッドを守るスフィンクスなどのロボットが登場する。本作品に登場する考古学者は「先生」と呼ばれ、考古学者でありながらピラミッドの盗掘団に加担している。彼は太った体型で、中央で分けた髪型に眼鏡をかけ、作業着を着ている。物語の中で考古学者らしくピラミッドの構造などを解説しているが、最後は学者としての良心に目覚めて殺されてしまう。なお、手塚作品は同じキャラクターが様々な作品に登場することが特徴の一つであるが、盗掘団の首領に『漫画大学』(1950年)以来多くの作品に登場する悪役のムッシュウ・アンペア、ドン・ペレス・ブラド博士の弟として同じく『メトロポリス』(1949年)以来多くの作品に登場するレッド公がこの作品に登場している。

1.2. 1960年代

1960年代の作品では、まず『鉄腕アトム』シリーズで1966(昭和41)年に『鉄腕アトムクラブ』2~3月号に連載された「人面岩の巻」がある(手塚1995)。この作品の舞台は日本であり、エリブリー族の古墳をめぐる物

-
- (1) この作品の中には「しばらくだねツタンカーメンくん」というフィレモン・サイクロンの台詞がある。
 - (2) 初期の手塚作品では、1950(昭和25)年刊行の『ふしぎ旅行記』の「ミイラ復活」にスーツにネクタイ姿でサファリ帽を持ったカイロ博物館の考古学者らしき3名が登場する。
 - (3) 1981(昭和56)年に日本教育テレビでアニメ化されたこの作品のタイトルは「スフィンクスの怒り」に変更されている。
 - (4) 手塚治虫は「冷凍人間の巻」の文庫版の冒頭部分で、昭和30年代の子どもたちはピラミッドといえどエジプトのギザのピラミッドしか知らず登場したマヤのピラミッドに驚いたり、この話がデタラメでエジプトのピラミッドを勝手にメキシコへ持っていったと怒った読者もいたと解説している(手塚2002)。

語である。人の顔をした人面岩という巨石は古墳を守るために存在しており、最後は自ら倒れて盗掘者を生き埋めにする。本作品では、古墳に隠された財宝を狙う墓荒らしの金三角（考古学者と自称）が登場する。彼は『鉄腕アトム』の「十字架島」（1958年）以来多くの作品に登場する悪役である。太った体型で禿げ頭、黒眼鏡をかけワイシャツにベストを着ている。なお、1981（昭和56）年に日本教育テレビでアニメ化されたこの作品はヨーロッパの話に変更されており、バイキングの財宝を狙う考古学者は古代ゲルマン遺跡を研究するアッチ博士となっているが、アッチ博士は財宝に執着する変人の考古学者として描かれている。

次に、石ノ森章太郎作品ではSF漫画『サイボーグ009』シリーズに考古学者が登場する。このうち、1960年代の作品では、1967（昭和42）～1969（昭和44）年に『冒険王』に掲載された「中東編」に中東で遺跡調査を行っているドロイタ・モウが登場する（石ノ森2002）。ドロイタ・モウは細身で白髪の老人、服装は映画やアニメなどの作品で考古学者の定番の服装であるサファリ・ルックである（櫻井2014）。モウは娘とともに盗賊に捕まり、一旦009たちに助けられたもののその直後にモーゼによって建物が崩され、下敷きとなって殺されてしまう。

1960年代のその他の漫画家の作品にも考古学者が登場する作品がある。まず、1960（昭

和35）年から1961（昭和36）年にかけてテレビの実写版が大ヒットし、1960（昭和35）年7月から漫画雑誌『ぼくら』に連載された『ナショナル・キッド』がある（一峰2008）。この作品はいわゆる「ヒーローもの」であり、主人公の旗竜作（ナショナル・キッド）は天文学者・原子科学者・考古学者（あるいは天文考古学者）という実際にはありえない設定となっている。旗は美形の若い男性であり、服装はスーツにネクタイ姿である。これに対し、当時一世を風靡したアニメが漫画化された作品として『宇宙少年ソラン』がある（宮腰1999）。この作品は西暦2600年の物語であり、主人公はソラン星から来た少年・立花ソランである。第一話で世界的考古学者である古月博士による発掘調査によってソランが乗った宇宙船が発掘されている。古月博士は禿げ頭で口髭を生やした小太りの人物である。服装はスーツに蝶ネクタイをしている。かなり強気な性格であり、科学省の大臣や様々な世界的な科学者や考古学者と親交があるという設定になっている。

1.3. 1970年代

1970年代になると考古学者が登場する作品が増加する。まず、手塚作品では1974（昭和49）年から『週刊少年マガジン』に連載された『三つ目がとおる』シリーズに考古学者が登場する（手塚1977～1981）。主人公の写楽保介は古代ムー大陸で高度な超古代文明を繁

- (5) 具体的には、ウル王朝（「ホア・カバリ・キルマ」）、ハラップ遺跡（「王者の剣」）、マヤ遺跡群（「ボキの島」、「調合台」、「妖怪島」、「メキシコシティに行く」、「逃避行」、「とざされた墓」、「乱戦」、「ティオティワカンの決闘」）、インカ遺跡（「めおと岩がくつついた」）、インディアン遺跡群（「ナバホ・ポイント」、「満月の奇跡」）、貝塚（「写楽の宝箱」、「貝塚の怪」）、ストーンサークル（「棒が出たァ!」、「塩水の雨が降る」）、古墳（石室・石棺）（「土器をもとめて」、「地下の都」、「盗掘の輩」、「ようこそ墓あらし」）、装飾古墳（「円盤騒ぎ」）、酒船石・石舞台古墳・猿石・亀石・鬼の雪隠（「調合台」、「酒船石奇談」）、モアイ（「モアイは謎をひめて」、「破壊への遺産」）、縄文土器・土偶・弥生土器・石器・金属器・埴輪（「写楽の宝箱」、「土器をもとめて」）などである。

栄させた「三つ目族」の末裔で、額の絆創膏をはがされると天才的頭脳と驚異的な超能力を発揮する。また、マヤのピラミッドやモアイ像、縄文土器や土偶など遺跡や遺物が登場するシーンが非常に多い⁽⁵⁾。この作品に登場する考古学者は写楽の親代わりの犬持医師の友人の須武田博士である⁽⁶⁾。須武田博士は太った体型で禿げ頭、丸眼鏡をかけスーツにネクタイ姿である。古代文明の専門家であるが、考古学のためには金も命も惜しまない性格であり、そのために写楽の超能力を利用しようとする場面もみられる。なお、『三つ目がとおる』ではこの他にも「王者の剣」でパキスタン人考古学者のズンダー・バンダー博士、「閉じこめられて」でT大学文学部考古学研究室の寺島博士が登場する。ズンダー・バンダー博士は細身で顎鬚を生やし、ネクタイにスーツ姿で頭にターバンを巻いており、寺島博士は細身で禿げ頭の中年男性で戦時中のため国民服にゲートル姿である。この作品は1970年代の超能力や超古代文明などのオカルトブームと切り離せない関係にあり、遺跡や遺物はそのための重要なアイテムとなっている。

次に、同じ手塚作品で1975(昭和50)年から『週刊少年チャンピオン』に連載された『ブラック・ジャック』シリーズに考古学者が登場する作品がいくつか存在する(手塚1993)。まず、「デベソの達」は、恐竜の発掘する達という若者(本名は三角達吉)が主人公である。中学校の先生が化石の発掘を彼に勧めるがその際に連れてきたのがM大学考古学研究所の伴俊作の研究室であり、その後

達は貴重な肉食恐竜(ゴルゴサウルス)を発掘するが、最後は発掘現場で亡くなってしまう。既に述べたように、手塚作品では同じキャラクターが様々な作品に登場するが、本作品では『鉄腕アトム』シリーズでアトムの担任の先生である伴俊作(ヒゲオヤジ)が考古学者として登場している。手塚作品における有名なキャラクターの一人である伴俊作は丸顔で禿げ頭、立派な口髭を生やしている。また、達が化石と一緒に石鏃(ヤジリ)や土器を掘り出し、考古学者の伴が化石の専門家であるように(「マリリン・モンローの家のトイレからナメクジの化石を発見した学者」という発言がある)、考古学と古生物学の混同がみられる。

『ブラック・ジャック』シリーズでは「のろわれた手術」においても考古学者が登場する(手塚1993)。古墳の石室から副葬品、石棺から遺体(ミイラ)を発見した3人の学者が落盤事故で重傷を負ったが、その後彼らを治療しようとした7人の医師は次々と事故に遭ってしまう。世間はミイラの祟りと恐れ、ブラック・ジャックに治療の依頼が来るというものである。ここでミイラを発掘した3人の考古学者のキャラクターは、『鉄腕アトム』シリーズのお茶の水博士、レッド公、さらに『怪盗黄金バット』(1947年)以来多くの作品に登場するガニマールである。明らかにわが国の古墳の発掘(盗掘)の話であるが、石室内に大量の埴輪が副葬品として置かれているなど実際にはありえない出土状況である。また、ブラック・ジャックの台詞にもあるようにエジプトのツタンカーメン王墓の呪いがこ

(6) 1985(昭和60)年に放映された日本テレビ系列放映(24時間テレビ)のアニメ『三つ目がとおる』では須武田博士が人文大学考古学教室の教授として登場するが、1990~1991(平成2~3)年放映のテレビ東京版アニメ『三つ目がとおる』では犬持医師が考古学者(秀真大学教授)として登場する。

の作品のモチーフになっていることは明らかである。

その他に考古学者が登場する手塚作品では、1971（昭和46）年から『SFマガジン』に連載された『鳥人体系』にムッサム考古学協会のデングル教授という鳥人の考古学者⁽⁷⁾が登場する（手塚1997）。この作品は人類が鳥に支配される未来を描いたもので、デングル教授は遺跡を守る人間の殺人を抹殺請負公社に依頼している。鳥に支配される未来の地球が舞台の本作品は人類が猿（類人猿）に支配されるアメリカのSF映画『猿の惑星』（1968年公開）を彷彿とさせる。

次に、石ノ森章太郎作品の『サイボーグ009』シリーズでは、1969（昭和44）～1970（昭和45）年に『COM』に掲載された「神々との闘い編」がある（石ノ森2002）。ここでは冒頭でモアイ像、マヤやエジプトのピラミッド、スフィンクス、アンコールワット、石舞台古墳などの遺跡群が登場し、考古学者小松隆正が石舞台古墳で死亡しているところを発見される。小松は顎鬚を生やした小太りの中年男性で服装はサファリ・ルックである。SF作品である本作品では世界各地の文明や遺跡と宇宙人（「神」）との関係が指摘されており、「神」の秘密に近づき過ぎた小松は彼らによって殺されている。

さらに、手塚作品や石ノ森作品以外で考古学者が登場する漫画作品として著名な作品が諸星大二郎の『妖怪ハンター』（諸星1978）である。この作品は登場する考古学者が物語の主人公である点が他の作品と異なる点である。稗田礼二郎は元K大考古学教授で「新進考古学者と注目をあびたが古墳についての小説で日本考古学会追放…」（「第1話 黒い探

究者」）とある。稗田は細身で肩までかかる長髪、黒いネクタイとスーツ姿という従来の考古学者イメージとはまったく異なる風貌である。内容的にも考古学だけでなく民俗学や古代史の要素が多く盛り込まれている。なお、『妖怪ハンター』は1991（平成3）年に「海竜祭の夜」が映画化され（『ヒルコ 妖怪ハンター』、塚本晋也監督、稗田礼二郎役は沢田研二）、2005（平成17）年に「生命の木」が映画化されている（『奇談』、小松隆志監督、稗田礼二郎役は阿部 寛）。『三つ目がとおる』と同様に本作品にも1970年代のわが国のオカルトブームの影響が想定できる。

これ以外に1970年代に考古学者が登場する漫画作品として、1972（昭和47）年から『週刊少年マガジン』に掲載された永井豪の『デビルマン』がある（永井1997）。主人公の不動 明の友人飛鳥 了の父親は著名な考古学者の飛鳥教授であるが、その風貌は細身でスーツを着て眼鏡をかけ、髪と髭を伸ばした鋭い目つきの神経質そうな人物である。また、1970年代の少女漫画では1976（昭和51）年の『月刊プリンセス』に初登場以来現在も連載を続け、この作品に影響されて考古学を志した研究者も多い細川智栄子の『王家の紋章』がある（細川1996）。本作品は、エジプトで考古学を学ぶため留学中である主人公のキャロル・リードが古代エジプト王（ファラオ）の墓を暴いたため、アイシスの呪術により古代エジプトにタイムスリップしてしまうことから物語が始まる。主人公キャロル・リードは短髪の活発な女性、エジプト考古学者のブラウン教授はウェーブのかかった長髪に口髭で眼鏡をかけ、ネクタイにスーツ姿の立派な体格の中年男性として描かれている。また、

(7) 鳥人の考古学者としては、アニメ映画『ドラえもん のび太と翼の勇者たち』（2001年公開）に登場するミミズクの考古学者ハウ博士がいる。

この他にも1971（昭和46）年に『別冊マーガレット』に掲載され、遺跡や自然を観光開発から守るといった興味深い内容である美内すずえの『日本列島一万年』に森下と20年間行方不明であった憲田有一の二人の考古学者が登場している（美内1979）。森下は禿げ頭の小太りの中年男性で冬の山中のためセーターにジャンパー姿、憲田有一は長い白髪と髭の着物姿の老人である。さらに、1978（昭和53）年に『SFファンタジア』に掲載された萩尾望都のSF短編作品「左ききのイザン」にもプロメ惑星で遺跡を一人で発掘している小太りで口髭を生やした中年男性である考古学者ブールが登場する（萩尾1996）。このように、初期の少女漫画にも遺跡や考古学をテーマとした作品が存在し、その中で考古学者の姿が描かれていることがわかる。

2. 1950～70年代の考古学界と漫画に描かれた考古学者

2.1. 考古学界の動向

敗戦によってわが国の考古学界は戦前の皇国史観から解放され、実証主義に基づく新たな考古学の道を歩み始め、それに伴って全国で新たな遺跡の発見が相次いだ。それを象徴するのが、1946（昭和21）年の群馬県岩宿遺跡におけるわが国初めての旧石器時代（先土器時代）遺跡の発見であり、1947（昭和22）年の水田跡を伴う弥生時代集落である静岡県登呂遺跡の発掘調査である。また、その後1950（昭和25）年には『文化財保護法』が公布され、1953（昭和28）年に「新しい科学運動」の実践として岡山県月の輪古墳が発掘調査されたこともわが国の考古学にとって重要な出来事であった。

また、1960年代になると1962（昭和37）年に私鉄の車庫建設によって平城京遺跡が破壊

される危機が報道され遺跡の保存運動が起きたことは、現代社会と遺跡の関係を考える契機となる出来事であった。その後、1965（昭和40）年には東京都で多摩ニュータウン遺跡調査会が発足し、ニュータウン建設にともなう広範囲にわたる大規模発掘調査が開始され、1960年代末から70年代にかけて首都圏を中心に発掘調査（開発に伴う緊急発掘調査）が日常化していった。その一方で1967（昭和42）年には宮崎康平の『まぼろしの邪馬台国』がベストセラーとなり、松本清張の『古代史疑』が1968（昭和43）年に出版されるなど、わが国に「邪馬台国ブーム」が起こっている（小川2002）。そして、1972（昭和47）年の奈良県高松塚古墳で彩色壁画が発見されたことが契機となって遺跡の記事が新聞の一面トップを飾るようになり、これ以降遺跡や埋蔵文化財が頻繁にマスコミに取り上げられるようになった。

2.2. 漫画に描かれた考古学者

このように、1950年代から70年代にかけてはわが国において遺跡や考古学が身近になった時代ではあったが、その時期に考古学者が登場する漫画作品は意外に少ない。この傾向は1980年代前半頃まで続くことになるが、この点はわが国の映画作品やアニメ作品に登場する考古学者についても同様である（櫻井2014）。

本稿で紹介した1950年代から1970年代にかけて考古学者が登場する漫画作品について検討してみると、まず1950年代に既に手塚治虫作品の『鉄腕アトム』の「冷凍人間の巻」に考古学者が登場している。彼は「先生」と呼ばれており、名前は不明であるがピラミッドを調査（盗掘）する内容であるため作品の中で重要な役割を果たしている。1960年代になると、同じ『鉄腕アトム』シリーズの「人面

石の巻」に考古学者として金三角が登場するが、こちらも考古学者というより盗掘者である。1960年代では石ノ森章太郎作品でも『サイボーグ009』シリーズの「中東編」にサファリ・ルックの考古学者ドロイタ・モウが登場するが、すぐに殺されてしまう。また、1960年代は子ども向けのテレビドラマの全盛期であったが、実写版が漫画化された『ナショナル・キッド』の主人公である旗竜作は科学者であり考古学者でもあるという実際にはありえない設定である。このような設定は当時のアニメ作品などにもみられる傾向である(櫻井2014)。さらに、アニメが漫画化された作品として『宇宙少年ソラン』があるが、主人公ソランの父親代わりの古月博士は政治的な手腕も備えた世界的考古学者であり、物語の中で重要な役割を果たしている。

1970年代になると考古学者が登場する作品は若干増加する。手塚作品では『三つ目がとおる』シリーズに登場する古代文明が専門の須武田博士が考古学者として重要な役割を担い、他にもズンダー・バンダー博士や寺島博士が登場している。また、『ブラック・ジャック』にも考古学者が登場する作品として「デベソの達」(伴俊作)と「のろわれた手術」(3名の考古学者)がある。「デベソの達」では化石(恐竜)と考古資料(土器や石器)が同一視され考古学と古生物学が区別されていないが、現在でも同様の認識の人は多くみられる。「のろわれた手術」については、漫画作品だけでなく様々な映画作品やアニメ作品の題材となっている「ツタンカーメン王の呪い」がその背景にあることは明らかであ

る。さらに石ノ森章太郎作品でも『サイボーグ009』シリーズの「神々との闘い編」で「神」の秘密に近づき過ぎて殺された考古学者小松隆正が登場する。

これに対し、『三つ目がとおる』シリーズとほぼ同時期に漫画雑誌に連載されたのが諸星大二郎の『妖怪ハンター』シリーズである。主人公の稗田礼二郎は古墳についての新説で日本考古学会を追放された考古学者という設定になっているが、この作品の背景に『三つ目がとおる』シリーズと同様に1970年代のオカルトブームや伝奇ロマン⁽⁸⁾の影響がみられる。この点について下垣仁志氏は1970年代前半のオカルトブームや超古代文明への関心、1980年代の「偽史的想像力」の前面化や考古学者という人物類型とフィクションの相性のよさがあると指摘している(下垣2010)。『妖怪ハンター』シリーズは稗田礼二郎が物語の主人公であることが他の考古学者キャラクターと異なる点であるが、こうした漫画作品における考古学者キャラクターの位置づけについては、『三つ目がとおる』の須武田博士や『宇宙少年ソラン』の古月博士のように主人公ではないが作品の中で重要な役割を果たしている考古学者キャラクターがいる一方で、『三つ目がとおる』シリーズの寺島博士、『サイボーグ009』シリーズの「中東編」のドロイタ・モウや「神々との闘い編」の小松隆正、『デビルマン』の飛鳥教授のように物語の冒頭部分で殺されたり、既に故人である考古学者キャラクターも多い。これらの考古学者キャラクターは作品の導入部分で物語の設定や主人公が置かれた状況を説明する

(8) 伝奇ロマンはSF系あるいはファンタジー系フィクションで、伝承や史実を幻想的に再解釈する作品であり、読者の現実社会と繋がっていることもその成立要件である。伝奇ロマンの代表的作家として半村良があげられる。

(9) この点は考古学者が登場する映画作品やアニメ作品においても指摘することができる(櫻井2014)。

ための重要なアイテムとして登場している⁹⁾。また、1970年代になると細川智栄子・美内すずえ・萩尾望都の作品にみられるように少女漫画の世界に遺跡や考古学をテーマとした作品が登場することも指摘しておきたい。

最後に、1950～70年代の漫画作品に登場する考古学者像について検討してみたい。まず、この時期の考古学者は基本的に中年男性である。具体的に見てみると、伴俊作(ヒゲオヤジ)や御茶ノ水博士など繰り返し作品に登場する有名なキャラクターを除くと、この時期の手塚作品に登場する考古学者は『鉄腕アトム』シリーズの「冷凍人間の巻」の「先生」と「人面岩の巻」の金三角、さらに『三つ目がとおる』シリーズの須武田博士である。三人とも太った体型で眼鏡をかけた中年男性で金三角と須武田博士は禿げ頭である。服装はスーツにネクタイ、ワイシャツにベスト、作業着と様々であるが、普段はスーツ姿で発掘現場や野外では作業着やベストを着ていることが多い。これに対し、石ノ森章太郎作品の『サイボーグ009』シリーズの「神々との闘い編」の小松隆正は小太りで顎鬚を生やした中年男性で服装は半袖半ズボンのサファリ・ルックであるが、サファリ・ルックは中東で発掘調査をする考古学者のイメージである。このように、太った体型で禿げ頭、眼鏡をかけたスーツ姿の中年男性は当時の学者イメージと重なるものであるが、発掘現場や野外では作業着やベスト、さらにはサファリ・ルックという出で立ちが考古学者のファッション・イメージであることがわかる。また、考古学者が中年男性であることは少女漫画にも当てはまり、細川智栄子の『王家の紋章』のエジプト考古学者ブラウン教授は大柄でウェーブのかかった長髪に口髭で眼鏡をかけ、ネクタイにスーツ姿の中年男性として描かれ、美内すずえの『日本列島一万年』の森

下は禿げ頭で小太りの中年男性、萩尾望都の「左ききのイザン」のプールは小太りで口髭を生やした中年男性である。これらの考古学者像は発掘調査に従事する活動的な中年男性のイメージであると言える。

これに対し、これらの考古学者イメージと異なるのが、諸星大二郎の『妖怪ハンター』の稗田礼二郎である。考古学者と自称しながら他のキャラクターと比較すると細身で肩までかかる長髪、黒いネクタイとスーツ姿は、前述した考古学者イメージとは明らかに異なる姿であり、むしろ民俗学者や宗教学者のイメージに近い。このように、わが国の初期の漫画作品に登場する考古学者キャラクターは、中年の学者や発掘調査を行うフィールドワーカーのイメージに描かれているが、1970年代になると、それらとは異なるイメージで描かれた考古学者キャラクターが登場してくることがわかる。

おわりに

1950年代から1970年代にかけてわが国の漫画作品に登場する考古学者キャラクターのイメージは、その身体的特徴や服装などから学者のイメージが強いが、発掘調査などのフィールドワークを行うため作業着やサファリ・ルックで登場することも多い。ただし、彼らは必ずしも正当な発掘調査を行う考古学者ではなく、『鉄腕アトム』シリーズの「冷凍人間の巻」や「人面石の巻」のようにピラミッドや古墳を盗掘する考古学者(トレジャーハンター)として描かれることも多い。また、これらの作品の中には明らかに1922年のエジプトのツタンカーメン王墓の発見やそれに伴う王の呪いがモチーフになっている作品や1970年代のオカルトブームの影響を受けている作品があるが、このことは当時の人々にと

って遺跡は古代の謎やミステリー、さらには呪いや超常現象などと親和性の高い存在であったことを示している。

いずれにしろ、これらの考古学者キャラクターは考古学に対するイメージだけでなく当時の世相を反映するものであり、それらが登場する漫画作品は考古学と社会の関係を探るための貴重な資料となることがわかる。

謝辞

本稿作成にあたって総合政策学部の小林正英氏より関連文献を御教示いただいた。

引用・参考文献

- 石ノ森章太郎『サイボーグ009 中東編』メディアファクトリー、2002年（初出『冒険王』1967年5月号～1969年6月号）
- 石ノ森章太郎『サイボーグ009 神々との闘い編』メディアファクトリー、2002年（初出『COM』1969年10月号～1970年12月号）
- 一峰大二（原作 貴瀬川実）『ナショナル・キッド』、マンガショップ、2008年（初出『ぼくら』1960年7月号）
- エルジュ（川口恵子訳）『タンタンの冒険 ファラオの葉巻』福音館書店、1987年
- 岡田知子「日本のマンガに見るカンボジア」上田広美・岡田知子（編著）『カンボジアを知るための60章』明石書店、2006年
- 小川伸彦「ブームとしての古代史」荻野昌弘（編）『文化遺産の社会学』新曜社、2002年
- 櫻井準也『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社、2014年
- 櫻井準也「遺跡調査の社会学—漫画と考古学—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第26号、2015年
- 下垣仁志「フィクションの考古学者」『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集遠古登攀刊行会、2010年
- ティスロン・セルジュ（青山勝・中村史子訳）『タンタンとエルジュの秘密』人文書院、2005年
- 手塚治虫『手塚治虫漫画全集 三つ目がとおる』講談社、1977～1981年（初出『週刊少年マガジン』1974年4月～1978年3月号）
- 手塚治虫「のろわれた手術」『ブラック・ジャック13』秋田文庫、1993年（初出『週刊少年チャンピオン』1975年3月号）
- 手塚治虫「デベソの達」『ブラック・ジャック12』秋田文庫、1993年（初出『週刊少年チャンピオン』1975年8月号）
- 手塚治虫「ふしぎ旅行記」『メトロポリス』角川文庫、1997年（初出『ふしぎ旅行記』家村文翫堂、1950年）
- 手塚治虫『鳥人大系』角川文庫、1997年（初出『SFマガジン』1971年3月～1975年2月号）
- 手塚治虫「冷凍人間の巻」『鉄腕アトム02』講談社漫画文庫、2002年（初出『少年』1955年7月号付録）
- 手塚治虫「人面岩の巻」『鉄腕アトム10』光文社文庫、1995年（初出『鉄腕アトムクラブ』1966年2～3月号）
- 永井 豪『デビルマン』講談社漫画文庫、1997年（初出『週刊少年マガジン』1972年25号～1973年27号）
- 中里修作「『タンタンの冒険』シリーズ全話解題」『ユリイカ 特集 タンタンの冒険』、2011年7月号
- 萩尾望都「左ききのイザン」『半神』小学館文庫、1996年（初出『SFファンタジア』1978年4号）
- 細川智栄子『王家の紋章』秋田文庫、1996年（初出『月刊プリンセス』1976年10月号～連載中）
- 美内すずえ「日本列島一万年」『日本列島一万年』白泉社、1979年（初出『別冊マーガレット』、1971年1・2月号）
- 宮腰義勝『宇宙少年ソラン』朝日ソノラマ、1999年（初出『週刊少年マガジン』、1965年20号～1966年45号、『別冊少年マガジン』1965年夏休み特大号）
- 諸星大二郎「黒い探求者・赤いくちびる・生命の木・闇の中の仮面の顔・死人帰り」『妖怪ハンター』集英社、1978年（初出『週刊少年ジャンプ』1974年37号～41号、1976年増刊8月号）